

迎賓館赤坂離宮を見学

～華麗さと優美さと～



迎賓館赤坂離宮正門

魔法で、王子と王女に変身!?
サクラの開花が南方面から聞かれる3月16日(金)、今年最初に訪問する場所は「迎賓館赤坂離宮」だ。迎賓館は明治42年に東宮御所として建設された日本最初の洋風宮殿だ。日本が国際社会復帰をめざし国として、外国の賓客をもてなす施設の必要性が高まり、1974年に国の迎賓施設として完成した。館内に入ると、魔法で王子と王女に変身させられた気分だ。

迎賓館赤坂離宮 本館へ
今回参加する史跡クラブのメンバー5人とOB3人の8人だ。大宮駅に10時30分に集合後、最寄駅の東京・四ツ谷駅をめざした。

およそ180種2万本の樹木に囲まれ、日本的な景色の中に現れる重厚で華麗な西洋建築、これが「迎賓館赤坂離宮本館」だ。賓客の場合は、正門から入るが、一般観光客は

正門の脇の西門から入場する。各人の持物など、セキュリティチェックされたあと、本館に入り順路に従って館内を観て回った。

別名「饗宴の間」と呼ばれる「花鳥の間」へ……

最初の間は、別名「饗宴の間」とも呼ばれ、現在、国賓・公賓主催の公式晩餐会が催される間であり、最大およそ130名の席を設けることができる。「花鳥の間」という名は、欄間のゴブラン織風綴織、壁面の七宝焼き、天井に描かれた36枚の油絵などに花や鳥が描かれていることに由来する。

(詳細は裏面参照)

玄関ホールから「彩鸞(さいらん)の間」へ……

内部に足を踏み入れると、そこは別世界。中央階段を登りつめると、正面玄関の真上

が「彩鸞(さいらん)の間」になる。主に晩餐会の招待客が国賓・公賓の謁見や、条約・協定の調印式や国賓・公賓のテレビインタビューの際に使用される。大鏡の上とマントルピースの両脇には、「鸞(らん)」と呼ばれる霊鳥があることから「彩鸞の間」と名付けられた。(詳細は裏面参照)

迎賓館の西側

「羽衣の間」へ……

迎賓館の西側に位置し、広さがおよそ300㎡の「羽衣の間」は首脳会談の会場として、また、在日外交団が国賓・公賓に謁見したり、晩餐会の招待客に食前酒や食後酒などを提供するのために使用される。2014年4月のアメリカ合衆国オバマ大統領との日・米首脳会談などで使用された。「羽衣の間」の天井には、謡曲の「羽衣」の景趣を描いた、290㎡にも及び大絵画が描かれている。高さおよそ3m、重さおよそ80kgのシャンデリアは迎賓館でも最も豪華なもので、およそ700個もの部品で組み立てられている。両側の壁は合わせ鏡になっており、どこまでも

続く廊下のような、拡がりのある空間を演出している。

(詳細は裏面参照)

このほか、2階 南面中央には国賓・公賓用サロンとして利用される『朝日の間』があるが、天井絵画等の内装の改修工事のため、平成29年2月15日から約2年間(予定) 閉室して見学できない。

当時の国民の、理解と

深い寛容さがあった……

「外交の舞台」を担う迎賓館赤坂離宮。明治42(1909)年の建設で、10年かけて完成した。総事業費510万円は「現在の500億から1千億円」(迎賓館庶務課)に相当した。明治天皇が「ゼいたくだ」と漏らしたとされる。これだけ豪華で華麗な建物が建造できたことは、当時の国民の深い理解と寛容さがあったことを、私たちは忘れてはならない。その後、昭和に入って改修工事が施され、1974年、現在の迎賓館が完成した。

私たちは本館の見学を終えたあと、咲き始めて間もないシダレザクラや記念樹で囲ま

れた主庭を巡り、最後に本館
の前庭をゆっくり見学して、
今回の日程を滞りなく終了で
きた。当日は小雨が降る中
の見学であったが、参加者のみ